慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	W・シュタルク 経済思想の根底に在る諸理想
Sub Title	W. Stark, "The ideal foundations of economic thought : three essays on the philosophy of economics."
Author	服部, 成三郎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1952
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.45, No.12 (1952. 12) ,p.872(58)- 880(66)
JaLC DOI	10.14991/001.19521201-0058
Abstract	
Notes	紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19521201-0058

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介

W・シュタルク『經濟思想の根底に在る諸理想』

W. Stark, The Ideal Foundations of Economic Thought.——Three Essays on the philosophy of Economics. London, 1948. (3rd Impress.) pp. 219

服部成三郎

本書は、K・マンハイム監修の、叢書 "International Library of Sociology and Social Reconstruction" 中の一册として刊行されたもので、(同叢書は、二十一部門に分れ、本書は "Philosophical and Social Foundations of Thought." なる部門に屬している。) 初版は、一九四三年に現れている。

著者のシュタルクは、ハムブルグ及びプラーグの大學に於て學位を得た、ユダヤ系の學者で、英國に逃れた後は、當叢書に於ての他にも "Rare Masterpieces of Philosophy and Science" の編者として、又ケムブリッヂの講師として、活躍を示している人である。最近、ベンサムの經濟學說に關する書を編輯してもいる。

さて、本書は、副題にも示された如く、三つの論文より成っている。之等はすべて、經濟思想史上に於ける、crucial な時點の持つ問題性を明かにしようとする共通の意圖によつて書かれている。乃ち、第一部は、〃古典經濟思想の哲學的基礎〃と題されて、十七世紀の偉才、ロック及び、ライプニッツの社會哲學が取扱われており、第二部、〃古典派經濟思想の終焉。自由主義、社會主義への岐路〃では、トマス・ホズキンと、ウイリアム・タムスンの對照が論ぜられて、マルクスへの一つの道程が暗示され、第三部〃近代經濟學の科學的基礎〃では、ヘルマン・ゴッセンと、リチァド・ジェニングスとの、謂わば、その途の先覺者達の思想が、古典派のそれとの比較に於て取上げられている。所謂〃問題史的思想史〃の類型に屬するであろう彼の論述樣式、そして又、此の三論文編成の形態は、誤れる思想より正しい思想への、一貫した論理を求める立場よりすれば、斷片的、逍遙的なものと見做されるに違いない。併し、彼としては、マンハイムの Relationismus (相關主義) の主張にならつて、自らの立場を是として讓らないであろう。彼自身の考え方の基調は、ケムブリッヂ學派の色彩が濃いものの如くであるが、單にそれを主張するというよりは、〃他の途〃を、そして、その問題意識の在り方をも、積極的に〃理解〃せんとする關心の强さが、彼の特徵と見られるべきであろう。

以下、本文の極めて素描的な紹介を試みよう。思想史的研究の紹介という如きものは、文獻の孫引き的なものに墮しがちであろうが、此の書自體の性格が、その危險を少くして與れている。私も尙出來得る限り、シュタルクの問題意識に、重點を置いて紹介してゆこうと思う。

(一) 古典經濟思想の哲學的基礎 (p. 1—p. 50)

古典派の經濟思想は、ルネサンス以後二世紀を要して成立した、一つの新しいコスモロジイとしての意味を內藏している。スミスやケネエの思想は、マンやモンクレシアンに負う以上に、ロックやライプニッツに負うているとも言える。

(A) 大なるアンティテーゼ・人間對自然

ロックは、認識論に於て、外的自然が、人間の感覺、觀念を支配すると見、道德論に於ても又、快樂、苦痛の感覺を一義的なものとする。自然主義的見解を採つた。併し、前者に於る〃反省〃の說明、後者に於る〃理性〃の說明に、一種の理神論的論據が援用れさており、この、謂わば自然科學と自然哲學の合一性という點に、彼の思想の特質が存した事は、周知の如くである。彼の社會的事象に關する態度も、將しく、之と同樣な性質を有している。彼の、經濟行爲論、財產論は、人間生活の "uneasiness" より出發しているが、主觀的價値論と、客觀的價値論との萠芽を、極めて特有な形で共有している。(p. 11)(註1) 前者は、快樂選擇の原理、後者は、勞働費用原理を意味するが、彼は、單に前者を個人主義的心理學として、後者を社會哲學として、二元的に理解するにとどまらず、之を統一的に把握せんと努めている。此の事は、心理學的な問題を取扱つた〃人間悟性論〃に於て、勞働價値が說かれ、社會哲學を取扱つた〃政府二論〃に於て効用價値が論ぜられているという、一見逆の構成が採られている事からも明らかである。乃ち彼にあづては、一應勞働が、主觀的非効用と見做され、限界に於て、快苦は均衡するものという、主觀主義的論理が採られている。にも拘らず其處では、財產關係を切離した、無前提的選擇原理が語られているのではない。勞働は、彼の場合、自らの爲の勞働が意味されており、價値論には、その實體的規定が含まれている。(註2) 價値の問題は、直接、財產論の問題と連結されている。使用價値は、そもそも勞働投下による、自然物の變容によつて生ずるが故に、勞働によつて使用價値に變ぜられた部分が、その人の財產となるとされている。此處に、彼の、自然法社會哲學の特質が見られる。彼は、此の際、太古の黃金時代を想定したり、孤島や、米大陸奧地の例を引いたりして、此の個人的意義と社會的意義の一致を物語つている。而して、貨幣の導入せられた現實の商業社會に於ては、之等の關係は成立たない如き口吻をもらす一方、又貨幣を單に寶石の如き裝飾物と見做し、その蓄積を是認的に說明してもいるのである。ボナーも、リッチーも、ラーキンも、夫々之等の點でロックを非難した。(p. 22, 24) 併し、ロックが、貨幣を價値貯藏手段であるが故に、交換媒介物たり得るものとして意識している事は、富の不平等を、飽くまでも勞働原理の結果として是認していた事を意味するもので

ある。この樣な、靜的な思想構造を採る事は、當時としては、必ずしも非現實的ではなかつたのであろう。理想と現實の顯著な對立意識は、其處には見られない。彼の社會哲學が、一見自然主義的樣相を呈し乍ら、實は、極めて顯著な調和論を內包していた事を、我々は以上の點によつて知る事が出來る。(p.25, 26)

(B)　大なるジンテーゼ・神の法

ロックの暗默の調和論に對し、一層明白な、且つ形而上學的に嚴密に規定された調和論を唱えたのはライプニッツである。彼は、全と個の問題を思索する事によつて、フィジカルな世界を超越して進まなければならなかつた。

最早それ以上分割し能わず、且つ夫自身他より獨立して存在すべき〃個〃。更には、個の集積であり乍ら、それに盡くる事なく、自ら連續性と無限性を持つべき〃全〃。此の兩者を共に求めて、彼は獨特のコスモロジーを建設する。モナド論之である。人間も、動植物も、自然物も、エンテレキーを有する事によつて眞の個體である。凡ゆる自然物は生命に滿ちている。(p. 31) 連續性をもつ全體とは、之等のすべてを調和せしめる秩序であり、神である。と彼は考える。此の際、彼は、當時の通俗哲學の主張と、デカルト主義者の理論とを、前者は、個の獨自性を破壞せしめ、後者は、調和的全體の觀念を稀薄ならしめるものとして否定し、(p. 38) 〃豫定調和〃の理論を提唱した。彼にあつても、個は、夫自身の原理、例えば快樂の原理に立脚し

行動すると見られる。調和は、その限りに於ては、潛在的、未來的なものでしかない。快樂性と善性は、神の力によつて究極に於て調和せしめられる。ロックの經驗論、ライプニッツの合理論の對立とは、一應斯くの如きものであり、それは類似の上に立つ對立とも言うべきものであつた。乃ち、十七世紀という時代は、經驗論的見地からも、合理論的見地からも、確固たる調和の信仰に賴つている時代であつた。この二つの立場は、共に夫々新しい經驗によつて、スミスやバスチアの十八世紀的世界に、(斯る時代把握は、純年代的規定とは一致しない。) 變容的に取入れられてゆく。古典經濟思想は、社會哲學の否定の上にではなく、寧ろ、社會哲學の合理化という使命と意圖を持つて現れているのであり、此處に、その realistic であると共に idealistic であると云う性格の根據が存するのである。

(註1)　シュタルクは、ロックが效用價値を objective value〔客體的價値〕として意識し、(それは、我々に滿足を與える對象の性質を意味するが故に。) 費用價値を subjective〔主體的價値〕として意識 (それは、生產の本質を構成する人間の努力を意味するが故に。) している事を指摘している。此の事は、周知の如き、subject, object の哲學的用語轉換としての意味以上に、多くの問題を含んでいるように思われる。

(註2)　シュタルクは、此の處理上の問題意識が、古典經濟學と、近代經濟學との間に存する根本的相異點であると見ているが、(p. 14) 之だけでは說明不充分である。古典派と彼が呼ぶものの範圍の漠然性も問題であろう。

(二)　古典經濟思想の終焉。自由主義、社會主義への岐路。(p. 51—p. 143)

十九世紀が進むにつれて、新しい經驗は、個人と全體の問題を、より實質的な平面に於て把握し直す必要を生ぜしめた。古典的調和思想の自足性は崩壞し、自由と平等、個と全の背反の問題が自然主義的に、理想主義的に、夫々新しく取上げられて來る。此の時代に生を亨け、興味深い思索を展開した二人の英國の思想家を此處で想起して見よう。

(A)　自由主義の選擇トマス・ホズキン

ホズキンは、ロックと同樣、自然法的勞働原理に出發する。土地は、空氣や日光と共に、神によつて人間の前に置かれたものであり、元來費用を構成しない。凡ゆる生產物は、生產手段をも含めて、勞働生產物であるから、要するに財產論と價値論は、人間の知的肉體的勞働給付の原理の上に統一さるべき筈である。併し、〃政治的社會は、この命令を犯した所から形成される。〃(p. 82) と彼は斷定する。ホズキンは、絕對地代の存在を疑わず、地主、資本家を、不當な權力の所有者として理解する。彼の搾取論が、自然法的、神學的なものである事は、スミス及リカアドに對する彼の態度からしても明瞭である。スミスが、地代や利潤を自然價格の原因と見た事は、現實の不正なる社會の說明としては、寧ろ正しい。スミスの理論に矛盾の存するのは、價値の財產的側面を直視した爲である。スミス以後の人々が、此の點に缺陷を示したのは、自然狀態と、現實の人爲的制度との區別を明瞭にし得ず、現存の法的權利を、自然的權利と混同した點に存する。とホズキンは觀るのである。(p. 69, 70) 資本利得を、一部の人は、待忍、貯蓄によつて說明する。併し、資本はその自らの利得を、先行の勞働の貯蓄からではなく、現在の勞働の中から引出すのである。資本は、勞働者を支配する一種の權力であり、賃銀は勞働者に生存するを許すのみしか與えられない。斯くの如き制度は自然に反すると言わねばならぬ。自然の狀態を實現する手段は何か。ホズキンは、其處で無政府的自由主義を提唱する。政府も警察も、市民としての幸福を妨害する性質のものであり、從つて悉く不要物である。彼は、封建國家と近代國家とを原理的に區別しようとしない。政治の組織、形體の相異などは問題でない。故に彼は、ベンサム的論議をも輕蔑する。如何なる形にもせよ、自然秩序の復興の爲、政府機構を用いてゆく事を拒否する。立法とは、法の廢止という事を除いては、極惡の欺瞞にすぎない。〃我々は、多くの他の人々と共に、生存手段が不公平に分配されている事を認める。併し、我々は政府が之を平等にすべきであると云う結論を出さない〃 (p. 88)

彼は、空想社會主義的實驗を嘲笑し、ルイ・ブランの運動の如きを〃文藝階級の自慰〃と評し去り、一八四八年の諸革命に

も不信の意を表わす。我々は、ホズキンに於て自然法思想の一極限を見る事が出來る。自然の支えてくれる人智の進歩に望みをかけよと云うのが、彼の唯一の答なのである。彼によれば、進歩の自然的過程は、ゲルマンの侵入以來大いに攪亂されてしまつた。併し、一般的には、進歩の動向は尙存在している。商工業の導入、生産力の向上は、その事を示している。現存の、誤つた法的權力は、勞働階級の成長によつて次第に消滅せられ得るに違いない、其の時こそ、警官も兵士も獄番もない、眞の自然的自由の世界が到來する時である。ホズキンは、斯く考えて周知の如く、勞働組合の勢力に加擔した。併し乍ら、晩年は此の傾向をも失い、全くの資本主義的自由主義者に成り終つて行つたのである。此の事は、彼の、一面徹底した、併しそれだけに空虛な〝自然〟觀からして、寧ろ當然の歸結とも言うべきであろう。自由主義思想を基礎付けようとする仕事は、當時既に、斯くの如き自然法理論に代つて、功利主義が別の道から行つており或程度の成功をおさめつつあつたのである。

(B)　平等主義の選擇、ウイリアム・タムスン

タムスンも、ホズキンと同樣に、社會の、本來存すべき自然的秩序の唱導に出發する。諸物實は、造物主によつて人間に與えられている。人間が、それに加える勞働のみが、社會的費用を形成する。現實の社會は、不當な所有關係に掩われている爲に、地代も利潤も獨占的賃貸料として存在しており、決して、

勞働の正當な報酬として存在するのではない。

勞働者が、資本家に、機械其他の前借の爲に支拂うべき部分、住居使用のため家主に支拂うべき部分等の大きさは、全く不當なものでしかない。勞働者側のメジュアによれば、それは、機械其他の、そして住宅の、減價償却部分と、若干の監督費用との合計を支拂えば足りるのである。現實の、一見自由なる交換組織は、決して眞の意味の、互惠的自由ではなくして、此の獨占機構を强化するためのものでしかない。少數なる一階級の、土地や機械や、資源の獨占が、今日までの社會惡の基礎である。(p. 117) とタムスンは言う。彼は、更に一歩を讓つて、生産の增大にのみ問題を限つて見ても、現在の經濟機構は最良のものでないと論ずる。搾取は、生産性を高める如く見えて、實は究極に於て、その目的を達成し得ない。正義應報の問題は、必ず生産增强の道に通じている。此處で彼は、ベンサム流の Security の觀念を批判し、自らの提唱するそれは、〝凡ゆる人々の生産力の安全であり、如何なる理由であれ、少數者によつて蓄積された、一群の勞働生産物の安全ではない。〟と說く。(p. 122, 129) 彼は此の少數者を、墮落せる浪費家の如くに畫き出す一方、之と矛盾するとも言えるが、資本の蓄積のみを念頭におく political economist を非難し、moral economist は、眞の最大多數の幸福を求めるとなして、〝富の增加は、それが幸福の增進に伴なわれなければ、合理的欲求の對象たる事を止めるだろう。〟〝與えられた富の量が分散される程、大きな幸福が生まれる。〟(各人は、等しき生理的組織を持つ故に、等しきものとして取扱われてよいとタムスンは考える。) 等と言つている。

彼はベンサムに倣つて、〝富の增加部分は、等しき個人の持分に、連續的に附加される時は幸福を産出する力を減少するに對し、多數個人の間に分配される時は、各部分の幸福産出力が驚威的に增大する〟と論ずる。(p. 127) 現實の社會機構では、この理想に達し得ない。タムスンは、此處から、どの樣な社會救濟策を歸結するか。彼は、ホズキンの "Labour Defended" に對して、"Labour Rewarded" を著して、ホズキンが、彼の自由の實現の爲に、勞働組合の勢力を過信した事を批判した。勞働組合の成し得る事は、資本の逃避其他、資本家側の試みる抵抗の爲に、極めて僅少な程度に止まるであろうと彼は考える。途は只一つ、既存の財産關係を根本から改革する事にのみ存する。平等なる社會に於ては、資本の蓄積が起らないとか、手工業的段階を脫し得ないとか云う懸念は不要である。利潤の爲ではない、自らの勞働生産力の向上の爲の蓄積が增大し、資本の技術的な意味での利益は、寧ろ高まるに違いない。彼は、以上の如く、生産手段の分配の平等という觀念を中心に、〝すべての人が資本家になる〟(p. 132) 共同社會を待望したのである。(註1) 彼は其の爲に强請を肯んじなかつた。(彼は、凡ゆる過去のユートピア實驗の失敗原因を「强請」という點に見出す。p. 142) 從つて彼はその社會の實現を近き將來に期待する事はしなかつた。

以上の二人の思想家は、共に進歩の理念を信じ乍らも、ホズキンが、眞のレセ・フェアの極限に理想を見たのに對し、タムスンは、平等の原則の遂行されるに從つて、個人主義的原理の維持そのものが困難となる事を知つていた。彼は市場的自由競爭を否定する時に、價値歸屬のメジュアが存在しなくなる事、そしてこの〝個人的に困難な事が、集團的に可能となる〟(p. 139) ことを期待した點に於て明らかにコレクティヴイズムの信奉者であつた。

ホズキンは、平等なるリベラリズムに、タムスンは、自發的なコミュニズムの原理に據つているのである。タムスンは、階級差の無くなつた社會が到來しても、競爭的原理は採用し難いものと見た。夫々の自己の意圖の隱し合い、其れ等に基く、個人的判斷の不正確性は、此の原理につきまとうだろう。〝彼自身の爲の各人〟の世界ならぬ、〝凡ゆる人の爲の各人〟(p. 141) の世界は、協同計畫の社會に於て實現される。其處には、需給の不均衡や、恐慌の存在する餘地はない。彼は斯くの如くに、理想社會を描寫した。

ロックやライプニッツの時代と比して、この二人の思想對立は何と激しい實質的對立であることか。ホズキンは、現實そのものの進化の中に理想を見ようとし、タムスンは寧ろ判然と、理想主義の立場から、協同主義的ユートピアを畫いた。社會思想としての、各々の意義は、かなり重要なものである。多くの

抽象性を有しながらも、此れ等の人々の論議が、自由と平等の問題に關しての新しい意識を、人々に自覺させた事は否定出來ない。マルクスに對する若干の影響も勿論見逃し得ないであろう。又之等の素材を吸收する事によつて、新しい社會哲學が編成される事にも成るのである。

（註1）資本主義の普遍的開花が、即ち新平等社會だと云う意識、それに伴う獨特の用語法は、當時としては珍らしくなかつた。

(三) 近代經濟學の科學的基礎（p. 149—p. 212）

所謂近代經濟學の成立は、古典經濟學に內在する社會哲學的問題を論外に置き、飽くまでも、フイジカルな、客觀的理論の限界にとどまろうとする態度と結び付いていた。併し此の風潮が抬頭する過渡期に於て、二人の思想家が、新しい方法によつて、古い問題を解決しようと試みていた。一人はヘルマン・ゴッセン、他はリチァド・ジェニングスである。

(A) 舊社會哲學の消滅

ゴッセンも、以上述べ來つた人々の思想と同じく、創造主の善性を信頼する。併しその場合のトーンは全く異つている。個人主義的快樂論は、最早獨立したフイジカルな原理として、第一義的なものと見做されている。社會的調和の原理が內藏する哲學的理神論は、十七—八世紀の產物であるに對し、個人主義的幸福の原理が歸結する科學的理神論は、十八—九世紀の產物なのである。ゴッセンの出發點は、孤立的個人の自足的幸福追求の原理であり、個人が、その原理に從つて行う評價行爲の上に、價値論は基礎付けられる。勞働の非効用的解釋は、夫自身全く自己充足的なものになつてゆく、彼は、交換の說明を中心として、現實の社會關係の中に於て、日々行われている、人々の選擇行爲の社會的意味を單に明かにしようとした。此の事は又、直接的なインターパースナルな効用比較を斷念した事を意味し、自らの社會制度批判の態度を宙に迷わせた事にも相通じている。寧ろ、彼は、各人が、各人の利益の最善の判定者たる理由を以て、積極的に自由主義の社會哲學を唱導し、古き神話に新しき科學を繼木せんとしたのである。併し、先にも述べた如く、事態は此の事を許さなかつた。

彼は、從つて地代の把握等に際して、主觀價値論的說明と、制度論的說明の間に存する巨溝を心ならずも自ら立證する如き破目に到るのである。（p. 164）

言換るならば、スミス的世界と、スペンサア的世界との過渡期は、リチアド・ジェニングス（1814—1891）によつて、略〻その移向を完成する。彼によれば、人間の性質と財貨の性質との間の關係が研究さるべきであつて、社會的心意法則の以前に、先づ孤立せる個人のそれが研究されねばならぬと言う。彼にあつては全く、ミルやスペンサー的自然主義、心理學的生物學的偏向が顯著である。彼に從えば、消費とは、事物が人間に、滿足の手段を與える過程を意味し、生產とは、人間が、事物に効用性を與える過程を意味する。前者に於ては、神經組織の輸入的經路が支配的であり、後者に於ては、その排出的經路が支配的である。（p. 172）

彼もゴッセンと同樣、不完全乍ら、限界効用的思惟を行つて居り、バーター成立の條件分析を媒介とする事により、主觀的價値を出發點として、交換價値を基礎付けんとしているが、その利子の說明の如きは、幼稚な物理的生產力說の上に立つてのものであり、賃銀の說明も、生ける機械としての勞働力把握に立脚するもので、之又物理的生產力說を、拔け切つたものではなかつた。彼の此の誤れる意味に於る自然科學主義は、ホズキンによつて批判された。〃ジェニングスの研究が、該科學の目的に必要でない事は、家を建てたり、衣服を作つたりするのに、庇護の觀念や、暖かさの觀念の心理學的、生理學的研究が不要であるのと同樣である〃とホズキンは言うのである。（p. 179）

(B) 舊社會理想の解消

此の時代の人々は、一面完全なる資本主義の實現こそ、眞の理想の到來であると感じ乍ら、他方に於ては、資本主義そのものの持つ限界というものをも感ぜざるを得なくもなつて來ていたと言う事が出來る。

ゴッセンは、一般的恐慌の存在を否定し、勞働者の配置轉換其他を圓滑にすれば、永續的失業等は有り得ないと見た。そして彼は市民的自由が極度に發揮される點に、理想を求める事に於て、最も典型的な理論家であつた、が故に、上記の目的を達成するに必要である、廣汎な智識や技術を勞働者に與える事も、寧ろ保護政策をとる事なしに行われると見たのである。ジェニングスに到ると、斯くの如き一元性は多分に消滅し、婦人や少年保護の問題、敎育の問題、更には必需品生產確保の問題が、寧ろ、道德的要求として持出される。現實上の自由主義と、空想上の平等主義とはより明確に分裂し始め、此處に、科學と社會思想の分離のきざしは益〻濃厚となる。ジェニングスは後者に關しては、〃貨幣は力である。故にその力は責任を以て行使さるべきである〃（p. 203）と云う如き、道德的改良主義に赴かざるを得なかつた。

近代經濟學は、此の分離の確立の上に出發する。故にイヂヴースはゴッセン、ジェニングスの兩者が、經濟學上の効用理論と、哲學上の功利主義との間に一線を引かなかつた事を非難した。（p. 208）此の非難が、どの程度當つているかは別として、彼等は謂わば此の一つの重要なる過渡期の人々として、意義を有している事は確かである。

× × × ×

以上で、シュタルクの、此の書は完結するが、その後書きに於て、限界効用理論は、決して十九世紀後半の新なる發見では

なく、ベンサムやベルヌイの一應主張した處のものであり、近代經濟學の出發點は、寧ろ、社會哲學からの開放という點に求めらるべきものである。と說かれている。シュタルクは、而して此の轉換を、必ずしも進步とは認め度くないと言う。現に、マーシャル以來のケムブリッヂ學派の發展は、再び、新しい方法によつて此の問題を處理しようとする動きを見せているではないか。ロックやライプニッツの精神は、社會科學の正しい傳統として受繼がなければならない。と彼は論ずるのである。頭初にも書いた通り、彼の〝理解〟的態度は諒解されるけれども、此の三論文は、一書の材料としては、何と言つても、バランスを失している。三論文は、夫々の項に二つの對立傾向を含ませつつも、㈠の時代が、㈡、㈢の二傾向によつて分裂し、思想性と論理性が分離してゆくと云う、より大なる意味での分裂を把握しようとしたものであるが、その意味でもう一層論述のバランスをとり、更に、後書きに見られた著者の問題意識に從つて、其の後の近代經濟學の發展、特に厚生經濟學的思想、一方に於ては、マルクシズムの抬頭と、その勞働價値說の社會學的意義―例えばマルクス價値論のリカアド的でない面の意味―斯ういう諸點が論ぜられて、一つの一貫した問題史的思想史の著述が成されてゆく過程に、之を組入れて行く態勢が整えられてゆく事を、我々は、心から待望するものである。思想と論理性の問題についても又自然主義と理想主義の問題についても、其の時には一層明瞭な觀念が形成され得る事であろう。尙、シュタルクが主として利用した諸著の主なるものを擧げておこう。（彼は、英譯本の利用等、嚴密に原典に據つていない場合もある。）

㈠ John Locke (1632—1704)
An Essay concerning Human Understanding, 1689—90
Two Treatises of Government, 1690.
Gottfried Wilhelm Leibniz (1646—1716)
Théodicée, 1710.
Monadologie, 1714. 其の他。

㈡ Thomas Hodgskin (1787—1869)
Labour Defended against the Claims of Capital, 1825
Popular Political Economy, 1827.
The Natural and Artificial-Rights of Property Contrasted, 1832. 其の他。
William Thompson (1785—1833)
An Inquiry into the principles of the Distribution of Wealth most conductive to Human Happiness, applied to the newly proposed System of Voluntary Equality of Wealth, 1824,
Labour Rewarded, 1827. 其の他。

㈢ Hermann Heinrich Gossen (1810—58)
Entwickelung der Gesetz des menschlichen Verkehrs, und der daraus fliessenden Regeln für menschliches Handeln, 1853.
Richard Jennings (1814—1891)
Natural Elements of Political Economy, 1855. 以上。

論文紹介

ヘンリー・H・ウェア
ソヴイエット國內商業における配給費
"Cost of Distribution in Soviet Domestic Trade"
By Henry H. Ware
(The Journal of Marketing, July 1950 Vol. XV, No. 1)

所謂商業學の發達が配給能率の增進をその中心的課題として展開せられて來たことは此の學問の强い技術論への偏向の上に見られるが、かかる配給能率測定の一指標として吾々は配給費を問題とする。しかしながら配給が消費者滿足の極大化にその目標を置くものであるとするならば配給費の絕對額それ自體は決して配給能率の指標たりうるものではない。ソヴイエットの經濟學者は計畫的配給の資本主義的配給に對する優越點としてソヴイエットの配給費が資本主義諸國家のそれの僅かに三分の一乃至四分の一に過ないことを强調しようとする。がしかしそれを直ちに配給能率の高さを物語るものとして受取ることは出來ない。むしろ吾々としてはかかるソヴイエットの配給費が果して何の程度まで消費者の滿足を實現しているか、此の點の吟味を進めることが第一の課題でなければならない。ウェア敎授の本論文における意圖も實はかかる觀點から配給費に關するソヴイエットの資料の吟味におかれている。

ソヴイエット當局の發表によれば、新經濟政策期における配給費は小賣價格の二〇％餘であつたが、一九三二年には一二・五％にそして更に一九四〇年には一〇％を僅かに上廻る程度にまで減少せしめられた。しかし大戰に入るや切符配給制度が導入せられ、それに伴つて販賣額は減少し、且つ重要戰略產業特に工業企業に the Workers Supply Department が設立せられ、その販路が著るしく狹められ、取扱商品の種類も極端に減少し正常な經營の維持が困難となりために配給費は增大の傾向をたどつた。此の傾向は一九四七年の切符配給制度の廢止後もなお當分の間は續いたが、かかる傾向を刺戟した原因の主たるものとして商品廻轉率の低下が指摘されなければならない。例えば食料品（パンを除く）の配給に必要な廻轉時間は一九四〇年には一三・四日であつたが一九四五年には二一・四日にまで增加し、工業製品については夫々四一・四日から六一・三日にまで增大している。しかしながらかかる配給費の增大があつたとしても、それは資本主義諸國家のそれに比して未だ著るしく低位に維持せられたことは事實である。しかしながら經濟環境を全く異にする資本主義國家の配給費との比較に際しては前以つて數字上の若干の修正を行わなければならない。

その修正點の第一としてソヴィエットの小賣價格には取引稅が包含せられており、その額は大凡そ小賣價格の五〇％と推定せられる。從つてもし小賣商店の賣上金高が取引稅の附加によつて人爲的に增大させられるとすれば、賣上高に對する配給費の比率はそれに比例して低下するであろうし、且つそれを資本